

小説で時代を振り返る

望月美波



主に好景気によって特徴づけられる1980年代は、それ以前の伝統的な日本からモダンな社会への移行期としても位置付けられる。80年代の初めではまだ保守的な考えが多く、層に受け入れられていたが、80年代後半から90年代にかけては新しいリベラルな考えも少しずつ浸透してきた。この二つの考えが共存する中で、80年代後半の進歩的な考えの台頭は日常生活や文学にも表れている。吉本ばなの1989年発表の小説「キッチン」はこの移り変わりを表している。

「キッチン」から見る80年代の日本

最初に、リベラルな考えの広まりは80年代以前からの伝統的な考えと相反しており、それに

より保守派との間で大きなジェネレーションギャップが生まれたことを説明する。ここで述べるジェネレーションギャップとは一般的に使われる年の差によるギャップという意味とは少し離れる。ここでは、保守派の人たちと新しい時代の主流な考えを持つ人たちとの間のギャップという意味で使われている。なぜなら、年配の世代でも比較的少数ながらリベラルな考えを持つ人たちはいたし、若い世代でも保守派の人たちは少なからず存在していたからである。このジェネレーションギャップは前述のように人々の日常生活に表れている。例えば、サラリーマンと大学生の職に対する態度はこの伝統対モダンの違いをよく表している。保守派の考えでは、エナジードリンクが「24時間戦えますか？」というキャッチフレーズと共にサラリーマンから人気を博し、長く働くことが奨励されていた。それとは対照的に、大学生は学業よ

り遊びを優先し、好景気の中で就職先にも困らず楽観的に暮らしていた。当時の大学生の大学生活に対する姿勢がリベラルとは言えないが、労働時間のみを評価する姿勢からの転換は見られる。リベラルな考えの広まりと、大学生の将来への楽観視は「キッチン」の登場人物の行動からも読み取ることができる。特に主人公みかげは、伝統的な「お金を稼ぐことが全て」のような考えではなく、自分の趣味の料理を「楽しいから」という理由で職業として選んでいる。また、長時間働くことや周りからの評判にとらわれず、自分のための決断をする様子からも進歩的な考えが見て取れる。何が自分のためになるのかわかっているのも、自分のための決断ができるのである。このリベラルへの移行は男女の性差にも大きな影響を及ぼしており、次の段落で分析されている。

上記の様に、男女格差＝ジェンダーギャップの向上はリベラルな考えの普及によって大きく影響された。80年代初頭では以前と同じように多くの女性の居場所は家庭内にとどまったが、伝統的な慣習全てが80年代を通して続けられたわけではない。90年代に進むにつれてバブル景気が終わりに近づき、家庭の仕事だけを任されていた女性も外に出てお金を稼ぐことが期待されるようになると、伝統的に男性が主流だった職種にも女性が進出するようになる。ここでは一時的に家庭と仕事との両立を求められ女性の負担が悪化したが、働く女性が増えたことで職場での性差のさらなる解消と「イクメン」と呼ばれる父親と家事を分担する家庭が増えることにつながった。小説中でも有名な「私がこの世で一番好きな場所は台所だと思う。」という一文に、女性の居場所が台所にあったということが示されている。台所は、みかげの亡き祖母と母が家族のことを考えて毎日ご飯を作り、長い時間を過ごした場所であり、どの家の台所も同じように母親が家族のために毎日三回立つ場所である。そんな台所という場所は天涯孤独になってしまったみかげが家族を感じられる唯一の場所であり、彼女に孤独でない居場所を提供している。

最後に、普遍的でない家族の在り方にモダンな社会の頭角が表れていることを詳しく述べる。伝統的には片親の家庭への偏見は大きく、家族のありようとして完璧でない、欠けていると思われていた。批判的な意見は片親に限らず、養子やLGBTQカップルなど一般的でない家族構成の家庭にも向けられていた。ここからの進歩はキッチンのメインテーマの一つであり、田辺家はトランスジェンダーの母親＝えりこ、雄一、そしてみかげの三人で構成されている。お互いのことを助け合い、最も近い人として扱うという意味では家族という形をとりながら、父親、母親と血のつながった子供という伝統的な家族の形を壊している。えりこさんを刺した男の理由が「彼女がトランスジェンダーだったこと」ということから田辺家のような考えが一般的に広く受け入れられていたとは考えづらい。しかし、そういった普遍的でない新しい家族のありようを受け入れる人たちが少しずつでも出てきているということから、この時代がモダンな日本への移行期であったと考えられるのである。



夫のスーツを直す妻の姿

このことから、80年代は伝統的な慣習も根強く残っていたが、進歩的な考えや伝統的な慣習に逆らった考えが台頭し始めた、モダンな社会への移行期だったと言える。キッチンの登場人物たちはその変化を体現しており、職や家族のありようを通して、多くの場合制限的で保守的な考えからの進歩を示している。

Bibliography

Interview

Hamano, Akiko et al. "Perspectives On The Global Issues In Japan During The 90S Through The Work Kitchen". Interview by SSST Cohort 2023. Chatsworth, 2022.

Pictures

"Japan Then And Now - Photo Essays". *TIME.Com*, 2022,
http://content.time.com/time/photogallery/0,29307,1905385_1898650,00.html.

2022, <http://iam>.